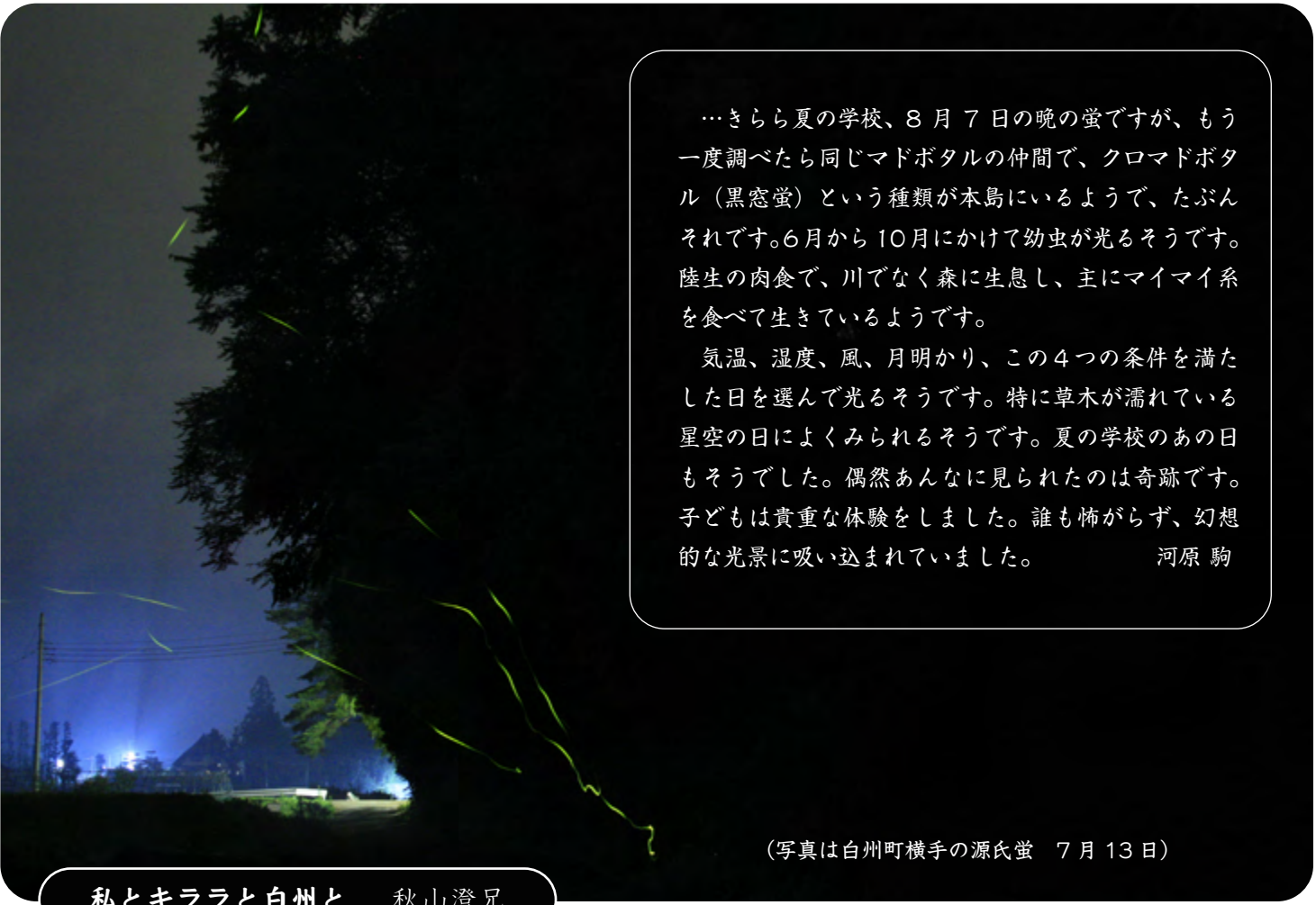




…きらら夏の学校、8月7日の晩の螢ですが、もう一度調べたら同じマドボタルの仲間で、クロマドボタル（黒窓螢）という種類が本島にいるようで、たぶんそれです。6月から10月にかけて幼虫が光るそうです。陸生の肉食で、川でなく森に生息し、主にマイマイ系を食べて生きているようです。

気温、湿度、風、月明かり、この4つの条件を満たした日を選んで光るそうです。特に草木が濡れている星空の日によくみられるそうです。夏の学校のあの日もそうでした。偶然あんなに見られたのは奇跡です。子どもは貴重な体験をしました。誰も怖がらず、幻想的な光景に吸い込まれていました。 河原 駒

(写真は白州町横手の源氏螢 7月13日)

私とキララと白州と 秋山澄兄

僕が初めて白州キララの学校を訪れたのは2年前の夏でした。その頃、バンド仲間の野崎君と子供達向けにワークショップをできないものかと話し合っていたところ、タイミング良く参加させて貰う事になりました。

初めて来た時は初めて来た感じがせず、そこからは、あれよあれよと言う間にキララや白州の魅力に引き込まれ、気がつけばスタッフになっていて、いつのまにか切っては切れないものになっている今現在です。

きららの魅力はただ大自然の中で過ごせるという、田舎に来ればごく当たり前のように過ごせるものとは違います。子供達と共に日々の生活を営み、学習し、労働により対価を得る。考えてみると、ごく当たり前のことを自然の営みに沿いながら、試行錯誤を繰り返し、生き延びて行くことなのかもしれません。

僕にとっては、その「ごく当たり前」のことをキララで子供達と一緒に学んでいます。ごく当たり前なことを学ぶと言うのは少しおかしい気もしますが、僕にとってはこれが今まで繰り返してきた自分探しとはまた異なり、自分築きになっていることではないかと思えて仕方がないのです。そこが引

き込まれている一番の魅力ではないかと考えます。

色々な意味で自分が鍛えられている、そんな白州きららの学校です。

お子さんがきららの学校に参加されたご両親様へ

白州から帰った後、お子さんはどんな反応でしたでしょうか。今回の夏の学校は、インゲンや大葉の収穫作業、じゃがいも掘り、森の展覧会、編笠山登山、森でネイチャーゲーム、麴づくりの体験学習、薪をつかったのごはんづくり、川遊びやきらら祭り…など、比較的たくさんプログラムをこなした一週間でした。

今、小中学生のお子さんをお持ちの方々は、いったい何を期待して「きららの学校」に大事なお子さんを送り出されるのか、また子供たちを白州で何に触れさせたいと思われているのか。わたしたち「きららの学校」スタッフはより具体的に教えていただきたいと願っています。

電子メールでも結構です。どうぞ、お気軽にご意見・ご感想をお寄せ下さいませ。 info@hakusyu.jp

11月3日(土)~4日(日)に「きらら秋の学校」が開催されます!

甲斐駒ヶ岳の紅葉の中、芋煮会、ほうとう作り、天体観察、セリ田の生物観察などが予定されています。

詳細は、 <http://www.hakusyu.jp/kilala/>

お問い合わせはお電話か、電子メール info@hakusyu.jp にてお受けします。また右のQRコードを読み取っていただくことで、携帯電話からも「きららの学校」の最新情報をご覧になれます。



きらら新聞 37



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそしむ」

2007年
8月30日

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北州市白州町横手 2259
白州郷牧場内
TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

単線ではなく、複線で生きる

最近、「有名」中学校に合格した子どもが、どのような部屋で、どのように勉強していたかを話題にした「教育本」が出版された。それによると私の勤務校に合格するには、移動式机を持って家のいたるところに移動して勉強するのが良いと強調している。私たちが「どうりで落ち着きのない生徒が増えてきた」などと言えば、さらにそれを増長し、我が校の受験を目指す子どもの親は、子どもに移動式机を与え、「あちこち好きな場所に移動して勉強しなさい」と強制するのだろう。

挨拶の仕方、食事の仕方、お金の使い方から他者との関係の仕方まで、一定の常識的枠組みが喪失している時代であることは確かである。まして「教育」の仕方に関しては一層右往左往している。ある意味で、今や学校自体が「世間」「行政」から罵詈雑言を浴びせられて、右往左往させられているのだから、ある意味で当然といわざるを得ない。しかし、このような、売らんがための軽佻浮薄な「教育本」で惑わすのは、犯罪的であるとさえ言いたくなる。

この紙面で何度か「ゆとり教育」の欺瞞について書いたが、文科省は「ゆとり教育」を進めた責任として「課長」を更迭し、手のひらを返して、子どもと学校を「学力テスト」の優劣だけで評価し、しかもその結果で予算格差をつけ始めた。話題になった足立区の学校の「涙ぐましい作戦」を「バカ」という一言で片付けることは出来ない。年間教育研究

費に200万円の差が出るのである。もし成績が悪かったのならば、これから頑張っ欲しいと、むしろ200万円増額することが道義ではないのか。

このような単細胞的単線基準で優劣化していくことで、枠組みを喪失した親と子どもはますます混乱に巻き込まれていくだろう。

数の世界に「実数」と「複素数」というのがある。実数は単線上に一行に並べられている数である。一行に並んでいることで、大小・多少を考えられることや、事柄の特徴を数値化することで明瞭になるなどの良さもある。その意味では、学力で判断することにも、一定の意味はもちろんある。しかし、複素数は複線の世界で、実数の世界と比較すれば、はるかに豊かで面白く、多様な事柄に対応出来る。実数は複素数の一部でしかない。単線的な実数の世界を含みこみつつ、しかし、それとは遥かに豊かな世界が広がっている。

子どもたちを単線だけではなく、複線の世界で生きさせていくことが、今私たちの早急の課題であり責任である。

余談：複素数を構成する要素として「虚数」があるが、この命名が最悪である。「実」数は実在し、「虚」数は実在しないと、中学・高校で学習した時に思い込まれた人も多いのではないか。実数も虚数も人間が必要に応じて創りだしたもので、いずれも実在するし、いずれも実在しないのである。(禅問答のようで失礼)

秋山 眞兄

今年も白州では、8月3日から一週間の

「きらら夏の学校」

が行われました!

「きららの学校」事務局より

夏の学校、無事終了することができました。中身の濃い、充実した学校ではなかったかと思います。

朝起きてから夜眠るまでのひとつひとつの動きや作務、プログラムなど、すべてにおいて子供達が「学習」できる取り組みを目指していきたいと思います。



開校式



作務のインゲン収穫



編笠山登山



食事作り



鶏をさばく



麴づくりの発酵講座



きらら祭りで模擬店



キャンプファイアーで合唱